豊明希望チャペル礼拝

2024／4／28

「被造物のうめき」

ローマ人への手紙 8：18～22

　私は、牧師になってから、二度、犬の埋葬(まいそう)に立ち会って祈ったことがあります。

　そのうちの一匹は盲導犬(ゴールデンレトリバー)でした(もう一匹は、教会のお隣の信徒の家の犬でした・・)。その犬の所有者(湧泉堂)は、法律家をめざして、法律で有

名な大学のその学生時代に全盲になられたのです。ときに、家族の都合で一緒に歩けないとき、彼は、彼とその犬一匹とで、家から、電車を乗り継いで、教会に通われました。犬の名前は、「グラティア(神の恵み)」と言いました。犬は、彼の目であり、ときに、彼の命の安全を守る盾でした。そして、彼に忠実に従い、文句一つ言わない、その犬は、彼の友であり家族でさえあったと思います。

　その犬が死んだとき、彼と奥さんから、教会の庭のはしにある桜の木の下に、そのグラティアを葬っていいでしょうかと言われたのです。そして、出来れば、私に埋葬のときに祈って欲しいと。気持ちは、痛いほど、良くわかりました。しかし、私は悩みました。人の葬儀はしても、葬儀と言わないまでも、犬の埋葬の手伝いを牧師がすべきかどうかということです。そのことに関わるべきかどうかという事でした。

　聖書をあらためて読み直していて、当時の私にとっては、不思議な聖書の箇所に行き着いて、むしろ、前向きに、この埋葬に関わろうと決断しました。それが、今日の箇所です。

　しかし、色々と学んでいるうちに、今日の箇所は、人間の創造から、この世の終わりにいたる、パウロの歴史観、救済論をもっとも色濃くあらわす箇所で

あるという事を知りました。また、人の救いは、世界の救いに密接に関わっているという、人の救われることの、思わぬ重要性についても教えられる箇所です。

さて、あらためて、今日の箇所のまとめである最後の箇所を読んでみます。

「8:22 私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。」

被造物とは、人間以外のすべてです。地球も、星々もそうですし、そこに生きる植物や動物、すべての生き物を含みます。もちろん、犬もネコも含みます。

パウロは、「私たちは知っています。」と念を押し、我々クリスチャン誰もが知る真理だと、あるいは誰もが知るべき真理だと強調したあと、こう言います。「被造物のすべては、」「今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。」

今に至るまでとは、正確には、アダムらが罪のためにエデンの園を追い出されてから、今、すなわち、パウロの生きた時代までと言うことであり、今日の今までということです。

被造物、すなわち、たとえば、犬、動物だけではない、桜も、山も海もと言うことです。犬、桜、山、海・・そのすべてということです。そのすべてが、うめき、産みの苦しみ、一般的に、出産など、重大な何ごとかがなされる為の、七転八倒(しちてんばっとう)の、苦しみ、うめきのなかにあるというのです。

そもそも、犬にしても、ネコにしても、ましてさくらや山や海にしても、そんな神学的なことを、うめき苦しみながら求めているのかということが問題ですが、聞いて見ても答えてはくれないだろうし・・・パウロには見えていたわけで、それでは、そうだとして、彼らは、今、いったい何を、求め、うめいているのかという、私たちには、一見、にわかに理解不能であるこのことを、さらに御言葉から聞いていきましょう。

さて、それでは、そうだとして、被造物は、何を苦しみ、何を求め、うめいているのかということです。今日の最初の箇所から、ここまでのところを今一度読みましょう。短い箇所ですので、ここまで一気にお読みしますので、何をうめいているのか考えて下さい。

何をうめき、産みの苦しみのように、何を求め、耐えて待ち望んでいるのか・・

ポイント：被造物は、人が救われて神の子となる事を「切実な思いで・・待ち望んでいる」

さっそく、早速、最初の節に答えがありました。

「8:19 被造物は切実な思いで、神の子どもたちが現れるのを待ち望んでいます。」

「神の子どもたちが現れる」のを待ち望んでいる。これはどういう意味でしょうか。神の子はキリストのことですが、「たち」と複数形となっていることから、神の子たちとは、キリスト者のことを指すと考えられます。ということは、私たちクリスチャンを待っていると言うことになりますが、パウロは、あえて「神の子」と言うことで、人間が、救われて、神の子とされることを願っているということを意味していると読めます。

すなわち、被造物からすると、少なくとも、罪を犯した人間(エデンの外の人間)を

待っているのではなく、罪を悔い改め、正しい者とされた神の子の現れを待っていると言うことであり、そのままの意味で言うと、被造物は、かつて、エデンの園で罪の無い人間が被造物とただしく関係を持ち共存していたような、そんな罪の無い人間が現れるのを待っているということです。それは、被造物側からすれば、被造物を、正しく統治してくれる人間を待っていると言うことであり、人間の側から言えば、被造物を正しく治められるように罪がない、正しい人間になってこそ、被造物と、良好に関係を持ちうると言う事になります。

さらに、言えば、人は、その罪を悔い改めて、贖われて、神の子となることで、被造物を正しく治められるのであり、被造物は、人間が救われて神のことなる事を、「切

実な思いで・・待ち望んでいる」ということになります。

内村鑑三の精神を受け継いだ、高橋三郎師(1920 年 10 月 20 日-2010 年 6 月 24 日)は、ここを解説してこう言いました。「いかに多くの命（動物）がゆえなく苦しめられ、殺され、うめきつつこの世界を去って行くか。なおその上、今や地球そのものの存立が危ぶまれてまでに、全地の荒廃は人間の罪のゆえに！おしとどめようもなく進行している。実にあらゆる被造物が、うめきつつ救いを待ち望んでおり、そのうめきが全治に満ちている。この実態を、パウロはすでに（2000 年間に）予感していたのであった。」(『ロマ書講義上』p361)」と言いまして、最初に一言触れましたように、被造物、地球の救いは、人の救いにかかっているというのです。

また、内村鑑三は、被造物は、何も語らず、まるで人間に感心がないように見えるが、実は、たとえば、聖書にこう書いてある「星々も共に喜び歌い、神の子達はみな喜び叫んだ」（ヨブ 38:7）と、言い、「山と丘は、あなたがたの前で喜びの歌声を上げ、野の木々もみな、手を打ち鳴らす」（イザヤ 55:12）とも言い、「これ、詩歌的(文学的表現ということではなく)にのみしかるにあらざるべし！」と言いまして、そういう意思を被造物は持っているのだと言いまして、「天然（自然）が天然らしくなるのは、人が人らしくなる時なり。山は再び、林におおわれ、川は岸を越えず、禽獣（きんじゅう）は人を怖れず、万物はことごとく安んず」と言いまして、人間が救われ、最初に神が望まれた、神の像としてつくられた人間が、救われて、神の子とされ、本来の人間の、その姿を取り戻すとき、自然も自然としての役割を、やっと幸せに果たすことが出来るようになるのだと言うのです。

自然は、星も、山も、丘も、あなたがクリスチャンとなることを、心から楽しみに待ち、うめきながら、いや、叫びながら、また、うめくように、私たち、被造物を、山を海を、そして、動物を、正しく管理してくれ、だから、救われてくれ、神の子となってくれと叫んでいるのだと言っているのです。

今日は、なかなか、聞かないような話をきいているなあと思っておられるかも知れません。しかし、むしろ、それが、少なくともローマ人への手紙の底流に流れる、パウロの歴史観であり、神の救済論であるのだと思うのです。

・・ところで、特に、プロテスタントのクリスチャンは、汎神論的な傾向を徹底的に排除してきました。汎神論とは、自然の中にも、神の意志を感じ、神を感じ、知ることが出来るという立場です。プロテスタントの神学は、神の御心は、徹底的にこの聖書と言う方法だけによるという立場です。もちろん、そうなのですが、たとえば、春は桜、また小さな動物たちを見て、また偉大な自然に接し、心打たれ、神を知る。そんな情緒まで削り落としてしまっているのかもしれないと思うのです。「被造物も神の子たちのあらわれを待っている。」

もちろん、その中心的な意味は、先に言いましたように、キリストを待っていると言うことですが、同時に、クリスチャン達の悔い改めと、神の子となることをも待っていると言う真理は、内村や高橋三郎に聞かずとも、どう読んでも理解出来るのです。

続きの御言葉を読みます。

「8:20 被造物が虚無に服したのは、自分の意志からではなく、服従させた方による

ものなので、彼らには望みがあるのです。8:21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。」

「虚無」とは、ローマ人への手紙「1:21 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。」にある、人が罪を犯した結果である「むなしさ」と似たものですが、被造物は、罪の結果ではないので、「虚無」ですが、いわば、罪の結果の空しさを、人と共に受けてしまったのです。ですから、パウロは、人は、自分の意思、自分の責任で罪を犯し虚無に服したが、犬なら、森なり、海なり、他の被造物は、自分の意思からではなくて、人の罪を結果を、一緒に被ってしまったというのです。

ですから、人が救われるなら、ましてや、罪を犯していないわけですから、人が救われて、たとえば天国、天のエデンの園のようなところが出来て、そこに行くというなら、被造物も、当然、人の罪ののろいである束縛から解放されて、人と同じ、神の栄光のめぐみに与るのは当然だと言うのです。

すなわち、天国では、自然も、人と共に再生し、はじめにあった、人間は自然の味方であり、自然も人間の味方であるようなきわめて良好な関係が回復すると言っているのです。すなわち、人が、神の子の栄光の中に入れられる日、被造物も、その本来の、被造物、自然、地球、宇宙、すべての被造物が、最初に作られた日に、それは「非常に良かった」（創世記 1:31）その状態に戻れるのだと言っているのです。

実は、今日、教えられてきた中での最初の設問、「被造物は、何をうめき苦しみながら求めているか」の答えが示されている旧約聖書の箇所があります(はじめから引用せよ！という話しですが・・)。

イザヤ書 11 章です。「11:1 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。」キリストが二度来られる救いの日、同時に終わりの日です。すなわち、天国、メシアが来たらせる国の光景をこう語ります。

「11:6 狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。11:7 雌牛と熊とは共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。11:8 乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。11:9 わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。【主】を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。」

その日、人間と被造物との本来の、正常な関係(11:8 乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。)を、取り戻すというのです。すなわち、すべての被造物との良好な関係です。また、それによって、被造物同士の関係もすべて正常化します(11:6 狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し)。これが、まさに、被造物が、ともにうめき待ち望んできた光景です。

「8:21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。8:22 私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。」

今週の歩み。私たちも、キリストの贖いによって、神の子とされたことを心から感

謝し、神の子の責任を果たすべく、すなわち、あらゆる被造物と共に歩む者の責任として、さらに多くの人が救われて神の子とされるように、そして、その向こうに、世界の平和があり、自然との共存があり、さらにその向こうに、神の国の実現がある、この壮大な、神の救済の歴史が進められるように、伝え、祈っていきたいと願います。